

1 はじめに

大槌高校は平成 23 年(2011 年) 3 月の東日本大震災津波発生時から多くの町民が避難所生活を送った場所の一つである。当時は千名を超える方々が大槌高校で数ヶ月暮らした。今年度在籍数は 176 名で 74%が町内からの進学者である。入学者数は、震災前は 100 名から 120 名前後で推移していたが、震災後は入学者が徐々に減り、令和元年には 42 名となった。

2 魅力化構想と地域協働事業

震災大津波以降の人口流出・子供の数の減少を受け、大槌町と大槌高校は平成 30 年 10 月、高校存続に向け、高校の魅力化を図るために町が中心となり「大槌高校魅力化構想準備会」を開催した。

平成 31 年にはその危機的状況を打開すべく、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業－地域魅力化型－」に申請し、3 年間の事業指定を受けた。同年 4 月には、町が NPO 法人カタリバに委託した 3 名の魅力化推進員が職員室に常駐することとなった。また、令和元年 7 月の魅力化懇談会では、地域住民と生徒の総勢 110 名が集まり、①地域として育てたい若者像、②通



令和元年 7 月魅力化懇談会

わせたいと思う理想の学校像、③魅力化の具体について話し合った。同年 11 月に開催された第 4 回魅力化構想会議では、「大槌高校魅力化骨子」(スクールポリシー)が承認された。地域の方々が抱いている、「こう在って欲しい」という生徒像と学校像、生徒が抱いている「こうありたい」という自分と生徒像そして学校像、これらが共有され、統合され作られた魅力化骨子の意義は非常に大きい。今まで地域や学校、NPO などがそれぞれ行っていた人材育成のベクトルが同じ方向を向き、同じ理想を目指すようになった。このようにして大槌高校の魅力化はその三本柱を①

探究カリキュラムのマネジメント、②県外募集、③放課後の学び、としてスタートした。スタートしたのはいいが、教職員は「本当にこれで生徒が育つのか」という疑心暗鬼と、総合的な探究の時間や外部との連絡、また、その相談に来る生徒への対応などで忙しくなるのではないかという不安に駆られていた。が、実際始まってみると、生徒たちがどんどん変わっていくのを感じた。生徒自身も自分が変わっていくのを実感した。大槌町をフィールドとして行われる探究学習では、地域との協働活動が積極的に行われ、その中で協働的な学びが盛んに起きていたのではないだろうか。

令和元年度のこの体験を生かし、5 教科でも探究寄りの学びを導入しようと令和 3 年度から学校設定教科「地域みらい学」を設定し、その中に「ひよっこり表現島」などの 5 つの科目を作った。これにより、普通教科に興味を失いかけていた生徒たちが活発に活動することになる。こうして 3 年間育てた結果、自信が無くいつも誰かの後ろに隠れていたような生徒たちが、しっかりと自分の意見を持ち、理由もつけて話せるようになり、自己肯定感を持つようになって卒業していった。そして、令和元年度に 42 名だった入学者数が 53 名、61 名、60 名、62 名と徐々に回復していった。

3 普通科改革

上記の文部科学省指定事業が終了後、令和 4 年度から新たな事業「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）」が始まった。個別最適な学びを充実させるためには、従来の普通科という学校の形を変える必要があると考えたからである。本校は国立大学進学から就職まで、幅広い進路希望を持った生徒が存在している。彼らの進路希望を叶えるためには選択授業が必要になってくる。また、学びについて生徒からアンケートを採ったところ、「学び直しがしたい」という意見がかなり多かった。このようなことから現在、令和 6 年度実施に向けて、生徒の興味関心に対応した選択授業を取り入れたり、デュアルシステムの導入や防災教育などの社会教育の単位化、はま研究会や復興研究会などの放課後の学びの単位化などの準備を進めたりしている。

4 まとめ

令和 3 年度から培った協働的な学びと、来年度から始まる個別最適な学びが結びついたとき、生徒に様々な変化が起きるに違いないと考えている。今後は、各種ネットワーク授業への参加や単位制への移行なども視野に入れた制度作り、学校運営を進めていきたい。

